

物語からことばへ ことばから役割へ

第1部 〈13:00~14:30〉

大阪大学箕面キャンパスは、OUGC (大阪大学グローバルキャンパス)として、外国語・外国学研究等の成果を介して地域の市民と世界を結ぶという使命のもと、昨年より大阪大学外国語学部・外国学専攻シンポジウムを開催しています。第2回となる今回は、「物語を紡ぐこと、その物語を翻訳すること」に焦点を当てて、ことばの持つ様々な役割について考えます。

トーク

狭間で待つ、ということ

作家 小川 洋子

小説を読むことは、しばしば旅にたとえられます。物語とは、私たちが日常から別の世界へと運んでくれる、素敵な乗り物なのかもしれません。でも、何かの拍子にこの乗り物が止まってしまったら？ どことも知れぬ場所、いつとも知れぬ時の狭間に取り残されてしまったら？ そんなひやりとする想像を誘いだす小川洋子さんの小説の魅力に、インタビュー形式で追ってみたいと思います。最新作『掌に眠る舞台』や世界各国で刊行されている『密やかな結晶』を中心に、創作という営みや翻訳について、また小説のなかの事物や登場人物の状況などについて、〈待つ〉という観点からお話を伺います。

● 聴き手



大阪大学人文学研究科
外国学専攻教授

田邊 欧



大阪大学人文学研究科
外国学専攻講師

篠原 学



講演

翻訳は物語を運び、新たな物語を紡ぐ —日本語学から見た村上さんと小川さん—



優れた言語表現は翻訳されて海外へ、世界へと運ばれます。もちろん、小説作品もそうです。翻訳に対して特異な関わりを持った作家として、まず村上春樹さんを取り上げます。村上さんは日本と世界で最も有名な小説作家の一人であるだけでなく、アメリカ小説の翻訳家でもあるのですが、さらに日本を舞台にした小説に登場する人物に、あたかも翻訳小説や吹き替え映画のような話体 (speech style) で話させるという技法を編み出しました。さらに小川洋子さんもまた多くの国・地域で作品が翻訳されている作家であり、またご自身も翻訳をされています。小川さんの作品には、翻訳がどのような影響を与えているのでしょうか。これらの点について、本講演では日本語学的に分析していきます。

放送大学大阪学習センター所長 金水 敏